

## 第2回大阪勉強会&交流会

映画『一人になる 医師 小笠原登とハンセン病強制隔離政策』上映会!!

映画監督・高橋一郎さんを偲んで

ハンセン病の治療として国策で推進された患者の隔離政策に異を唱え、「不治の病」ではないと訴え続けた医師の生涯に迫ったドキュメンタリー映画「一人になる 医師 小笠原登とハンセン病強制隔離政策」(2021年、99分)を、9月10日の第2回大阪勉強会&交流会で上映しました。監督は、COMLの仲間であり、模擬患者や病院探検隊の活動にも加わっていた高橋一郎さん。昨年6月にこの作品のイベントのさなかに倒れ、67歳で急逝しました。勉強会では、高橋さんが所属した市民グループ「映画製作委員会」の三木啓子さんのお話もあり、参加者は高橋さんを偲びつつ、100年前に「患者が主役」の姿勢を貫いた小笠原医師の生きざまに触れました。(まとめ 坂上晃一)

### 小笠原医師と映画について

小笠原登医師は1888年(明治21年)、現在の愛知県あま市にある真宗大谷派の圓周寺に生まれました。京都帝国大学卒業後、大学病院の皮膚科特別研究室でハンセン病患者の治療にあたりました。当時、ハンセン病は強烈な伝染病だという誤った認識から、国による患者の強制隔離が進められていました。そのなかで、小笠原医師は診療や研究に基づいて、ハンセン病は感染力が微弱であり、感染したとしても発症する人とならない人があるという「体質論」を唱え、治療も可能だとして強制隔離に抗います。医学界で激しい攻撃を受けても信念を曲げず、患者が隔離されないよう、カルテの病名欄を空白にしたり、「皮膚炎」「神経炎」などと記したりすることもありました。定年後は、国立病院や国立療養所に勤務。1970年に82歳で亡くなるまで、患者に寄り添う医療を実践しました。

映画のチラシにはつぎのように作品が紹介されています。  
〈この国では、ハンセン病をわずらった人たちが、人間としての尊厳を奪われ、家族たちも差別と偏見にさらされる、いのちを削らなければならない、という状況が続いてきました。

国は1907年に「癩予防ニ関スル件」を制定。ハンセン病患者を「強制隔離」するという政策をはじめました。そして政治家や法律家、宗教家やなんと医師までも、その過ちを見抜けず、無批判に「追従」してきたのです。それが1996年の「らい予防法」廃止まで、89年も続いてきたのです。

この間、「人間回復」への闘いがこつこつと積み重ね

られてきました。「ハンセン病は不治の病ではないし、遺伝でも、強烈な伝染病でもない、隔離は必要ない」と言い続けてきた一人の医師がいました。小笠原登は、一人の医師として、一人ひとりの患者に接し、患者を「隔離」から守ろうとしたのです。それは国という「厚く高い壁」の前には、小さな「抵抗」でしかなかったかもしれませんが、隔離の中で生きる人々に仄かな灯りをともしつづけたのです。

真宗の僧侶でもあった小笠原登を生み出した「土壌」と、彼をのみ込んでいった国策、それに歩調をあわせた真宗教団。そのような時代社会にあって、「一人になる」ことを恐れず、医師として信じる道を進んだ背景や、人との出会いを描いたのがこの作品です)

### 高橋さんと映画

「一人になる」上映後、三木さんが高橋さんと映画についてつぎのように語りました。

私は2005年、企業などに出向いてハラスメント防止の研修や講演をするアトリエエムという会社を作りました。講演や研修はできないけれど学びたいという声にこたえてDVDづくりを企画し、映画製作委員会の高橋さんとプロデューサーの鶴久森典妙さんをお願いしたのが出会いです。多くのDVDを丁寧に作っていただきましたが、2人が自主制作された映画のDVDの管理を私の会社に委託したいという話があり、映画製作委員会の事務局も担っています。

高橋さんと鶴久森さんは、1984年の映画製作委員会の設立からずっと一緒に映画を作ってきました。最初の作品は「24000年の方舟」です。タイトルは、原子力発電所の核廃棄物であるプルトニウムの放射能の半減期

にちなんだものです。原発では毎日電気を作る一方で、処理できない放射性核廃棄物を出し続けている。この矛盾を追及した作品でした。86年の制作当時だけでなく、2011年の福島原発事故後にも大きな関心を集めました。

91年にはアトピー性皮膚炎を追究した「奇妙な出来事 アトピー」を制作しました。高橋さんの息子さんがアトピーだったのがきっかけです。当時、アトピーはそれほど問題になっていませんでしたが、子どもたちの健康が脅かされている事実が社会と時代の構造が大きく繋がっていると問題提起しました。大きな反響を呼び、全国1000ヵ所以上で上映会が開催されました。ビデオになると保健所や製薬会社からも注文が届きました。

2012年にはハンセン病問題をテーマにした「もういいかい～ハンセン病と三つの法律～」を制作します。ハンセン病回復者にインタビューを重ね、偏見や差別をあおった政策は国が作った三つの法律が根底にあると訴えた大作でした。その後制作されたのが「一人になる」です。小笠原登という医師の姿勢は現代にも通じ、「同調圧力」に屈しない方だったと言えます。彼は国家公務員であり、医師であり、真宗大谷派の僧侶でした。どの立場でもずっと一人でしたが、信念を貫いた。高橋さんは「一人でもモノが言えるということは、民主主義の基本だ」と言われていました。また、「優生思想がずっと残り続けている」と強調し、相模原市の知的障害者施設で45人が殺傷される痛ましい事件に触れ、自分が悪いことをしたとはまったく思っていない犯人にも優生思想がうかがえる、と指摘していました。

熊本地裁で争われた国家賠償請求訴訟では、小笠原登から学んだ医師たちが原告側の証人に立ちました。この証言なくして勝訴判決はなかった。小笠原登の遺志は現代にもしっかりと受け継がれている、と高橋さんは話していました。

この映画を作るにあたって、高橋さんはハンセン病患者の治療に携わってきた和泉眞藏医師の自宅に行き、模擬患者をされました。上半身裸になって、顔や腕、足をどんなふうに見られるのかを細かく聞き、その様子をDVDにまとめたのです。映画では患者を診察する場面がありますが、演じた劇団の方たちにそのDVDを渡していたそうです。できるだけ忠実に演じてほしいという高橋さんの思いの表れだったと思います。

高橋さんは宝塚大学の教授として学生に映像やシナリオ論を教えながら、つねづね、「50年後も見てもらえる作品を作りたい」と言っていました。鶴久森さんも「テーマにしてきた問題は何かまだ解決していない。一人でも多くの人に映画を見てもらって一緒に考えていきたい」と語っていました。2人の映画の根底には「命・人権・環境」

という大事なテーマがあり、それを多くの人に届けて、一緒に考えたいと望んでいました。鶴久森さんは昨年11月、高橋さんの後を追うように、がんで亡くなりました。悲しんでいるだけでは2人のお叱りを受けそうですので、遺志を後世に伝え、映画を広げていきたいと思っています。



高橋一郎さん

映画にかける高橋さんの思いについて語る三木さん(手前は高橋さんと鶴久森さんの遺影)

### 寄せられた感想

勉強会の会場で参加者から寄せられた声や、メールなどでCOMLに届いた感想の一部を紹介します。

**Aさん** とてもよい映画で、感激しました。人権に関するだけでなく、現代からみると狂気に走ったような考え方や政策が社会にどのような影響を及ぼすのか、考えさせられました。自分も一人の人間として、一人になっても正しい判断をしていくために、どうしたらいいのか、と思いつつ見させていただきました。

**Bさん** 小笠原医師に巡り合えた患者とは違い、隔離され、管理された患者(その家族も)の人生に大きな影響を与えた大きな「失敗」から学び、現代社会や未来へ生かすことが我々の責任であると学ぶきっかけになりました。義務教育で健康や医療(医療システム)についての正しい情報を理解することが大切と考えます。

**Cさん** 映画の冒頭の「一隅を照らす」という言葉が印象的でした。僧侶でもあった小笠原医師は時代の流れ、国策のなかで権威者、学会などに一人で対峙し、暗闇のなかであっても信念と先見性で臨まれた。その人となりにも感銘を受けました。一方で、戦後になっても強制隔離政策は続き、小笠原医師に連なる人らの動きで近年、国策の廃止、国家賠償請求訴訟の勝訴につながったこと、それでも優生思想は残っているという高橋監督の言葉を知り、いろいろと考えさせられました。今日的には新型コロナウイルス感染症と人権問題にもつながる、難しくも大切な問題を内包していると思いました。